

文化財学習会

ふるさと探訪

テーマ 十河城跡を訪ねる

講師 大嶋 和則

(市文化財専門員)

平成26年5月25日(日)

共催 高松市歴史民俗協会
高松市文化財保護協会
高松市教育委員会

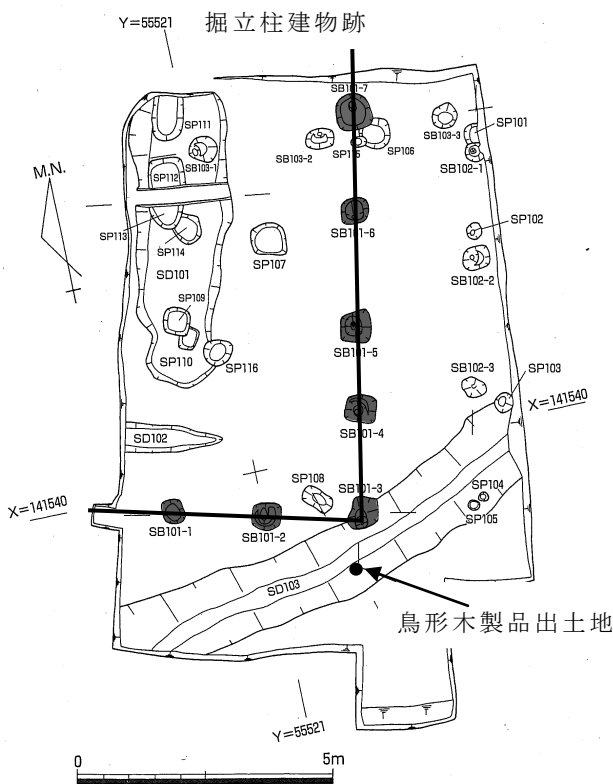
1 南海道跡・讃岐国往還跡

南海道は古代の行政区画の五畿七道の一つで、紀伊・淡路・阿波・讃岐・伊予・土佐が該当します。また、これら諸国の国府と都を結ぶ官道を指します。道の行程は、紀伊から海路で淡路を経て鳴門市撫養で四国に上陸し、大坂峠を経て讃岐に入ります。讃岐国では引田（東かがわ市馬宿）、松本（さぬき市大川町田面）、三谿（高松市三谷町）、河内（坂出市府中町）、甕井（多度津町三井もしくは善通寺市弘田町永井）、柞田（観音寺市柞田町）に、駅馬等を配置する駅が設けられました。

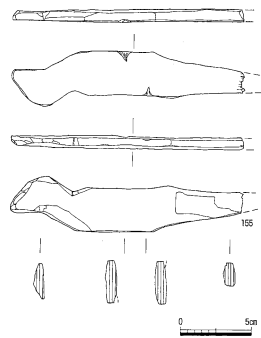
古代に作られた南海道は、その後も位置が少しずつ変化しながらも地域の主要ルートの一つであり続け、江戸時代には讃岐国往還として、讃岐の東西を行き来する主要道路としてその役目を担ってきました。高松市内では十河から川島にかけて古代の南海道と同じ位置に現在も道路が見られます。

2 西下遺跡

十河小学校増築に伴い発見された遺跡で、古墳時代後期から飛鳥時代（概ね七世紀）の遺構が中心です。調査地南部で検出された溝が最も古く、七世紀初め頃のものです。



西下遺跡平面図



出土した鳥形木製品

また、七世紀初めの溝が埋まった後の七世紀代には、条里地割とほぼ合致する掘立柱建物跡や溝が見られます。高松平野の条里

この溝からは鳥形木製品が出土しています。鳥形木製品とは、その名のとおり、鳥の形を模した木製品で、ムラの境界や入口に立てられた標柱などの上に付けられたと考えられています。ムラに侵入者が来ないように見張ったり、追い払ったりする力があると考えられており、現在の鳥居の原形ではないかとも考えられています。高松市内では伏石町の井出東一遺跡とこの西下遺跡の二例が知られています。

地割は南海道を基準に施工されたと考えられており、遺跡の南に所在する南海道の成立時期を考える上で、重要な遺跡と言えます。掘立柱建物跡は東西三間以上、南北四間以上で、柱穴の一边は六〇センチで、柱間が一・八メートルで、当該期の掘立柱建物跡では高松平野の中でも大型のものです。

3 権現堂（吉田神社・熊野神社）

寛文九年（一六六九）の『大政所書上』において前田西町に所在する瀧本神社に関する記述に「御旅所は十河村権現堂の由申伝候」との記述が見え、瀧本神社の御旅所であったとされています。現在は吉田神社・熊野神社の二社が建てられています。いずれも鯉宇神社の境外末社で、吉田神社の祭神は国常立命、熊野神社の祭神は伊弉諾命です。

4 光清寺

文明年間（一四六九〜一四八七）に高木坊（善良）によって建立され、延宝年間（一六七三〜一六八一）に寺号を許されたと伝わります。幕末には高松藩が朝敵となった

際に、京都の興正寺の末寺として地方の寺々を廻って、松平家の救済に尽力しました。

境内南東端には大正一〇年（一九二一）に建立された鐘楼しょうろうがあり、一切経が収められています。

また、庄松しょうま（注1）にまつわる逸話がいくつか知られています。庄松が光清寺の本堂にて子どもを遊ばせて

いたとき、自ら逆立ちをして見せていたところ、村人から軽業と評されたので、庄松は「おまえ達が地獄へ真つ逆さまに落ちていく真似じゃ」と応酬したときれます。

また、加賀国金沢から後生（来世）について不審があるため、庄松に教えを乞いに来た者がいましたが、庄松はその者が三日間逗留している間「知らない」の一点張りでした。諦めて帰るときに「後生は阿弥陀様が助けるぞ」と大声で言ったとされます。



光清寺鐘楼

(注1) 庄松(寛政一一年(一七九九)〜明治四年(一八七一))

庄松は、東かがわ市丹生の土居に生まれて主に縄ないや草履造りをしていましたが、子守や寺男として諸所で重宝がられていました。東は引田から西は丸亀の間を放浪して、信仰の道について身をもって話しました。三本松の勝覚寺(真宗興正派)の門徒で、信心の深さではだれにも劣らなかつたので、讃岐の庄松と広く知られています。

5 西尾天神社古墳

にしおてんじんしゃこふん

直径三十五メートル、高さ四メートルの円墳です。埋葬施設は不明ですが、墳丘中央部に規則的に並んだ石材が露出しており、長さ約三メートル、幅約五十センチの竪穴式石郭の可能性が考えられます。発掘調査は行われていませんが、埴輪や鉄製品が採集されており、古墳時代中期後半(五世紀後半)頃の古墳と考えられています。

また、墳丘周辺では弥生土器や石器が採取できることから、周辺に弥生時代の遺跡がある可能性もあります。現在、墳頂には天神社が鎮座しています。

6 松宇神社

まつうじんじや

和銅年間（七〇八〜七一五）の創建と云われています。神社境内地は昔、林であり、林の中に一本の松の大樹があり、夜ごと光を発していました。神様が人に憑りついて「朕は石清水の宮に鎮座する八幡大神の奇霊なり、此の地に宮敷なして此の一郷の人民共を守らなん。近程此の松枯れぬべし。其の時此の木を以て神像作り奉れ」とのお告げをしました。数日後に松が枯れたので、郷民が相談してその松から神像を作って、余った木で社殿を造営し、氏神として祀ったとされています。祭神は誉田別尊、ほんだわけのみこと足仲彦尊、たらしなかつひこのみこと息気長足姫尊です。おきながたらしひめのみこと

境内の東側の木陰には菅原神社、桜神社、



松宇神社

梅神社、大土神社おおつちの四社が並んでいます。それぞれ菅原道真、木花咲夜姫命このはなさくやひめのみことと猿田彦命さるたひこのみこと、刺国若比売命さしくわかひめのみこと、大土神おおつちのかみを祀っています。雷、水、山、大地を象徴する神様です。

松宇神社の宮司は代々東原家が務めています。水平は嘉永三年（一八五〇）に一七歳で元服しました。漢学を藤沢南岳と山田勝次に、皇学を吉成譲と友安良助に学びました。剣と槍は宮脇新太郎、柔術は清水繁之丞を師として奥義を極め、免許皆伝となりました。嘉永年間（一八四八〜一八五四）頃から昼は学問、夜は武術を教え、門人は一時四〇〇人を超えていたと言われています。その門人の中には、後に二度も剣道の展覧試合に出場した植田平太郎範士九段などがいました。

7 松宇八幡馬場古墳まつうはちまんばばこふん

松宇神社の馬場の中ほど西側に出雲神社を祀っている場所にあります。墳頂は削平され、直径約八メ



松宇八幡馬場古墳

1メートルの平坦地となっています。このため、墳丘の原形はとどめていませんが、直径一〇メートル程度、高さ二メートル以上の円墳であったと考えられています。発掘調査が行われておらず、出土品も知られていないため時期は不明です。

8 源勝寺

げんしょうじ

近江源氏を祖とする佐々木四郎祐盛すけもりは文明年間（一四六九～一四八七）に出家して名を玄空と改め、山田郡十河村大字東檀原に小庵を創建しました。その後、天正年間（一五七三～一五九二）に兵火にあって焼失し、三木郡田中村大字朝倉に移り住みました。さらに、寛永年間（一六二四～一六四四）に現在地に一字を建立し、寛永二〇年（一六四三）本願寺第一三世良如上人より寺号を免許され、好谷山勝光院源勝寺と号しています。現在は西本願寺派に属しています。

9 宮尾薬師堂

みやおやくしどう

本尊の木造薬師如来坐像は寄木造、漆箔であり、胎内の銘文には「南無薬師如来延宝二年（一六七四）五月吉日洛陽大佛師清水弘安造之 願主山田郡坂本□□一遂敬白

五拾七歳」と記されています。また胎内仏が納められており行基の作と伝えられています。

ほかに石仏の如来坐像も祀られており、昔、当敷地にあつた松の大木の根元から掘り出されたと言われています。

10 鰹宇神社 かつうじんじや

摂津国に鎮座していましたが、大化年間（六四五〜六五〇）に森口帯刀たてわきが靈夢に感じて十河郷に来て一社を建てました。その後、一町南に靈地があるという神託によって、今の地に移したとされています。弘治年間（一五五五〜一五五八）には十河一存かずまさが崇敬して祭田を寄進しています。天正年間（一五七三〜一五九二）に兵火にかかり社殿は無くなりましたが、森口左近が再建し



鰹宇神社

ました。祭神は品陀和氣命、帶中日子命、ほんだわけのみこと おきなかつひこのみこと
息長帶姫命です。おきながたらしひめのみこと

鯉宇神社の名称は、最初に神を奉じて
十河へ来るときに、土佐から朝廷に鯉を
奉って帰還する船に便乗したことに由来
します。

拝殿西側には経塚も見られます。

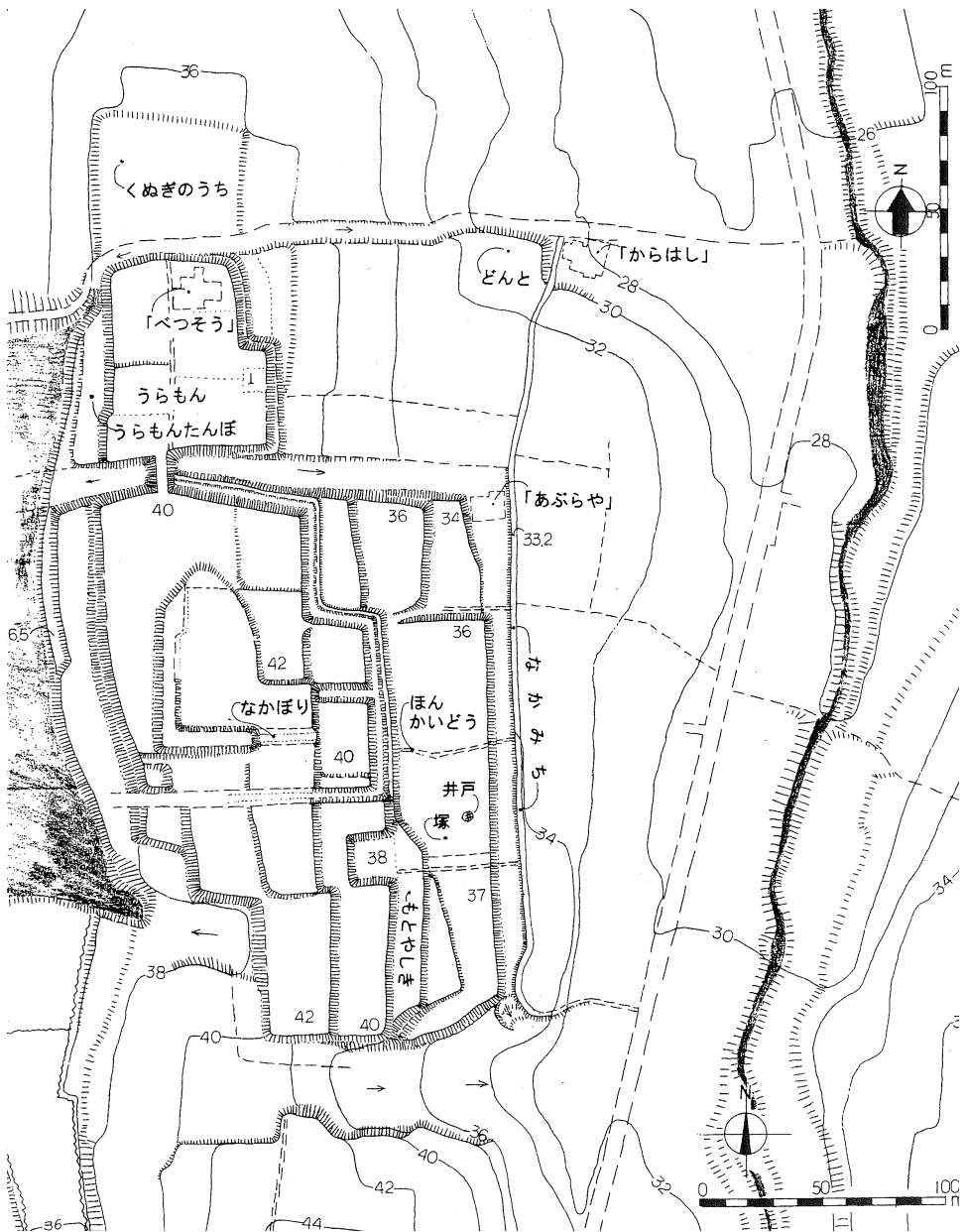
11 そごうじょうあと 十河城跡

①城跡の概要

十河城跡は東は川、西は谷（現在は鷺池）に挟まれた舌状の台地上に所在します。
南に大手を設け、他の三方は湿田に囲まれ、土塁を五重に築き、堀を深く切り立てて
いたので、攻め入るすきがなかったと言われています。現在、称念寺が建っている六
○メートル四方が本丸で、西と北側に腰郭の平坦地が付属しています。それに接して
北側に空堀を造り、土橋で北の郭とつないでいます。



経塚

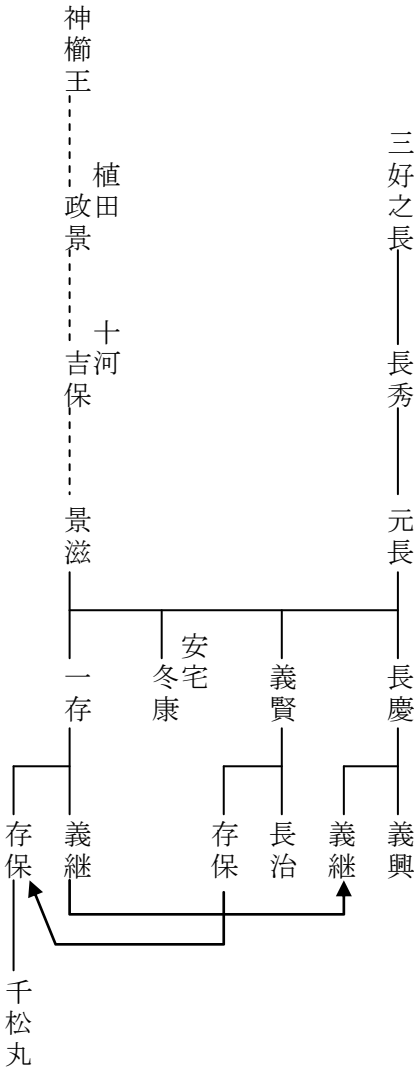


十河城縄張図

② 十河氏の出自

城主の十河氏は景行天皇の皇子で讃岐の国造の祖とされる神櫛王かんぐしおうの末裔の植田氏の一族とされています。応安四年（一三七一）に地頭十河千光が蓮華王院領山田郡十河郷の年貢を請負っている古文書が残り、室町時代初期には十河氏が在地武士として存在していたことがうかがえます。

また、『南海通記』によると貞治元年（二三六二）正月、將軍足利義詮の執事だった細川清氏は佐々木道誉の讒言によって疑いをもたれました。清氏は南朝方に馳せ参じ、四国平定をめざし、讃岐に渡って三木町の白山のふもとに陣を構え、南朝方に味方す



十河・三好家略系図

るものを招き集めました。十河氏が最初に清氏の下を訪れ、味方する旨を伝えました。清氏は会って祝いの酒を進めたところ、「私は三人兄弟の一番下で、兄は神内、三谷と申します。兄たちも訪れてともに盃を頂きたい」と言い、その日は帰りました。後日、兄弟三人で清氏に拝謁しました。清氏は十河の才を褒め、二人の兄を差し置いて総領になるように命じました。

③ 津柳合戦

その後、室町時代の讃岐は管領細川氏の領国として細川氏に従っていました。戦国期に至り、十河氏が大きな力をもつようになるのは、同じく細川氏に仕えていた阿波の三好氏との結び付きをもったことによると考えられます。三好氏が十河氏をはじめとする植田一族と密接な関係を持って讃岐の東部をうかがうようになりました。

十河景滋かげしげと寒川元政の数年にわたる争いは続き、大永六年（一五二六）に阿波の三好氏は十河氏を助けるために援軍を派遣しました。三木町の津柳から、寒川に入ろうとしたところ、寒川氏の兵が急襲し、三好氏は敗走しました。これを津柳合戦と言います。その後、三好氏は十河氏と軍議し、長尾へと向かいました。一方、香川氏と香

西氏は一宮へ五千人の兵を出し、十河氏や三好氏の動きを牽制しました。十河氏をはじめとする植田一族は、讃岐の諸勢力と対立するようになりました。

④ 鬼十河（十河一存）かずまさ

そのような状況下、十河景滋の嫡子金光が早世してしまい、三好長慶ながよしの弟が十河氏を継ぎ一存と名乗りました。

一存の武勇を語る逸話に寒川氏との戦いがあります。寒川氏の家臣に鴨部というものがおり、その子供に神内と源次という兄弟がいました。源次は子供のころから十河氏につかえていました。一存は源次を召して、もともと寒川氏の家臣であるので寒川へ戻り、兄弟一緒に戦場へ赴くように命じました。その後、一存はわずかの兵で寒川領に攻め入り、長尾のあたりで合戦となりました。先陣が攻防を繰り返していると、ろに鴨部神内と弟の源次が一存の本陣に突然襲いかかってきました。神内は槍で一存の左腕を刺し貫きましたが、一存は太刀で槍を切り、神内を倒しました。一存は戦いに勝って引き返し、槍で受けた傷には塩を押し込み、蔓でぐるぐる巻きにして出血を止めました。これ以降、世間の人は一存のことを鬼十河と呼ぶようになりました。ま

た、一存の髪型は特徴的で、十河額と称されました。一存はその勇猛果敢な武力で畿内の戦いでも活躍し、三好家を支えました。

三好長慶は、主家である管領細川晴元と対立し、晴元をしのぐ勢力をもち、將軍義輝を擁立するなど、幕府の実権を握りました。一存は、子の義継を兄・長慶の養子として三好氏を継がせ、次兄の三好義賢の子存保を自身の養子とし、三好氏との関係を深め、その後楯をもって讃岐の中で力を持ちました。しかし、一存は有馬温泉に湯治の際に落馬したことにより、永禄四年（一五六二）に亡くなりました。

⑤ 十河存保の長宗我部元親との戦い

一存の後、三好義賢の子である存保が十河氏を継いでいました。しかし、天正五年（一五七七）、存保の兄である三好長治ながはるが細川真之まさゆきとの抗争により自刃すると、翌六年（一五七八）、家中の動揺を回避するため勝瑞城しょうずい（徳島県板野郡藍住町）に入り、阿波一国をも支配するようになりました。

やがて、長宗我部元親が四国統一の軍を起こし、存保は次第に劣勢を強いられました。存保は織田信長に援軍を請い、中国出兵中の羽柴秀吉と結んで長宗我部元親に対

抗しました。しかし、天正一〇年（一五八二）六月、本能寺の変により信長が亡くなると事態は急変しました。同年八月、長宗我部元親は、西讃の香川之景ゆきかげの養子とした自身の次男香川親和ちかかずを総大将として、土佐・阿波・西讃の兵一万余を要して東讃に押し寄せました。また、阿波の勝瑞城には元親の本軍二万三千が迫りました。これに対して存保は、兵五千を率いて自ら勝瑞城を出て、先陣二千余を前面の中富川の川原に配し、長宗我部軍を迎え撃ちました。存保の先陣は二万余の大軍を一手に引き受け「先陣二千余人今日を限りに」と最後の死力を尽くしましたが、大敗北を喫しました。存保は勝瑞城を出て虎丸城（東かがわ市）へと退去しました。

香川親和は、香西佳清よしきよが籠城する藤尾城（香西本町）に攻め入り、激戦の末、香川之景の仲介で降伏させました。香西佳清の兵一千を味方に加えた香川親和の兵一万一千は十河城を取り囲みました。十河城では一存の庶子である三好存之まさゆきが城代として城を守っていましたが、長期戦を覚悟し城兵を一千に絞り込み、兵糧三ヶ月分を運び込んで、籠城戦の準備を整えました。

その後、香川親和は十河城の四方を囲み、攻城のために道を造りましたが、城中には多数の鉄砲があり、四方の櫓から鉄砲を撃つたため、道造りも中止となったと言わ

れています。また、城内には大砲が二門あって、それを櫓に運んで次々と砲撃したとされています。さらに、前田城（前田東町）の城主前田甚之丞宗清（じんのじょうむねきよ）が夜討ちを仕掛けるなどの活躍をしました。

一方、長宗我部元親は阿波岩倉から山越えし、香川親和と合流し、総勢三万六千まで膨れ上がりました。しかし、十河城を落城させる事は出来ませんでした。そして冬となり、平木城（木田郡三木町）に監視の部隊を置いて長宗我部元親は一旦土佐国に撤兵しました。

存保も秀吉に援軍を乞い、天正一一年（一五八三）四月、秀吉の命を受けた仙石秀久軍が動き出しました。淡路島から小豆島に渡り、喜岡城（高松町）や引田を攻城しましたが、攻めきれず撤退しました。また小西行長も香西浦に押し寄せましたが、上陸できないまま撤退しました。

一方、秀吉は、小牧・長久手の戦いで織田信雄・徳川家康連合軍と戦いを続けます。この時、家康は長宗我部元親に味方し、淡路国に進軍するように呼びかけました。しかし、十河城が落城していなかったことから、元親は家康の要望には応えられずにいました。四国平定を急いだ元親は、天正一二年（一五八四）に平木城に入りま

した。ついに城代三好存之は十河城を開城し、十河城には長宗我部親吉ちかよしが入ることに
なりました。

⑥ 豊臣秀吉による四国出兵

小牧・長久手の戦いが終わると、秀吉は天正一三年（一五八五）に四国に出兵しました。総勢一二万三千余の兵力で、讃岐には宇喜多秀家・蜂須賀正勝・黒田孝高ら二万三千の兵が送り込まれました。この秀吉の四国出兵により、長宗我部元親は土佐一国の領有となり、讃岐は仙石秀久に与えられますが、うち二万石が存保に与えられ、存保が十河城主に返り咲きました。

⑦ 戸次川へつぎの戦い

天正一四年（一五八六）には秀吉による九州出兵に伴い、仙石秀久は存保の手勢五百余のほか、長宗我部元親、その嫡子信親など四国勢を引き連れ出陣しました。豊後戸次川へつぎの合戦において存保と長宗我部元親は、仙石秀久の作戦に反対しましたが、聞き入れてもらえず、出陣することになりました。この時、存保は家人を呼び、「跡継

ぎの千松丸を連れて上京し、戸次川の戦いの際に存保はこのように言っていたと申し上げ、秀吉公にお目通りさせよ」と言つて十河に返したと言われています。また、合戦の最中、存保は長宗我部信親に対し、「今日の合戦は仙石氏の謀略のまずさによるといえども、恥辱は先手にあつた将帥にあり、長宗我部信親引き返つて勝負を決したまえ。存保加勢申さん」と言い、二人とも敵に突つ込み、壮烈な戦死を遂げました。

その後、千松丸も早世し、十河城は廃城となりました。現在、城の本丸跡には称念寺が所在しています。

12 そごうかずまさ まさやす せんまつまる はか 十河一存・存保・千松丸の墓

城の北の郭には十河一存・存保、さらに、存保の遺児である千松丸の墓が所在します。向かつて左側が一存、右側が存保、中央が千松丸の墓です。

戸次川の戦いで存保が討死した時に、千松丸はわずか八歳でした。讃岐の領主仙石秀久は戸次川の作戦の失敗により改易となり、仙石氏の後に讃岐の領主となった尾藤知宣も同じく九州出兵での失敗から改易となり、天正一五年（一五八七）に生駒親正が讃岐の領主となりました。天正一七年（一五八九）に生駒親正は、自分の孫である

大塚采女うねめと千松丸を連れて秀吉に拝謁しました。

秀吉は千松丸にどのくらい領地を与えているのかと問うと、親正は「まだ子供なので花紙代として三千石を与えている」と回答しました。秀吉はそれを聞き、「存保ほどの子に三千石渡しているのは、まさに花紙代にすぎない」と不満足な様子に見えたそうです。また、大塚采女のことには何も触れずに、千松丸には「親にも劣らない優れた子、立派に成長せよ」との言葉をかけました。十河氏の家臣たちは家の再興も間近と期待していましたが、千松丸は早世してしまい、十河城も廃城となりました。一説には生駒親正によって毒殺されたとも言われています。

13

孝女以呂の墓こうじょいろ はか

百姓の宗三郎の娘以呂は年老いた両親と暮らしており、日雇いをして両親を養い、



十河一存・存保・千松丸の墓

夜は家で両親の面倒をみて、わずかな賃金のうちから両親の好きなものを買ひ与えて孝養をつくしました。近所の者から縁談があつても、他人が家にいると遠慮がちになり孝養も思うようにできなくなると言つて応じませんでした。後に母が病氣になると以呂が家を離れることもできず、生活もますます苦しくなりました。母の死後は、父に仕え孝養を尽くしました。

そのことが藩主に聞こえて、褒美として米三表、錢五貫匁もくだされました。このち以呂は毎月一回必ず城下に行き、城を拝んで帰ることを常としました。文化二年（一八〇五）五五歳で亡くなりました。以呂の家は田六畝を所有しており、どんなに貧乏になつてもこれを売らず、秋に収穫があると真つ先に公課にあて、残りはことごとく村中の神社や仏事に分献しました。

死後、以呂の家を調べたところ、褒美の米や錢はすべて残っており、近隣の人々は驚き入つたと言われています。

以呂の一三回忌にあたり、政所の池内武存が石碑を建て、以呂の事績を刻んで後の世まで伝えることにしました。

むかし、大きな杉の木があり、夜になるとあかあかと光り輝きました。里の童が神がかりし、「われはアメノコヤネノミコトなり」と言ったので、杉の木で社殿を作り、お祭りするようになったとされています。十河存保は城の鬼門（北東）にあるこの神社を尊崇した言われています。天正年間（一五七三〜一五九二）兵火にかかり焼失しましたが、後に再興されました。

神社の宝物として保存されているものに、鰐口わにくちがあります。鰐口は、金鼓ともいい、仏教の法要儀式や僧侶たちの集団生活の合図ごうに使う梵音具ぼんおんぐの一つで、清浄な音を出す仏具です。古代には多用されていましたが、現代では、神社仏閣の軒先につるし、礼拝の時、布で編んだ綱で打ち鳴らしています。梶尾神社の鰐口は直径二一〇センチの小振りのもので、神社の北東百メートル余の「ご



鰐口

まんどう」と呼ばれている所から、元文年間（一七三六〜一七四一）に掘り出されたものです。「讚州山田郡十河郷梶尾大明神大師堂元心文和三年甲午三月十一日」の銘があり、文和三年（一三五四）の作で、県内最古の鰯口です。

また、神社には豆太鼓があります。むかし、境内で赤牛が死に、牛の腹の中にあつた豆が芽を出し、どんどん成長して大木となりました。里人たちは相談し、豆の大木で豆太鼓を作ったとされます。十河城が長宗我部軍に攻められた際に、城内の兵士はこの「豆太鼓」の合図で力を合わせよく防戦したことから、なかなか城は落ちませんでした。しかしついに開城、長宗我部軍は豆太鼓を奪って川之江あたりに放置しました。太鼓は「梶尾にいぬ、いぬ」と言って泣いたようですが、行方不明のままとなりました。その後、太鼓なしの祭事が続きましたが、文政六年（一八二三）にウバメガシで太鼓を作り、今に豆太鼓の由来を伝えています。

参考文献

十河歴史研究会一九九一『十河郷土史』十河村制百周年記念事業実行委員会

高松市教育委員会二〇〇八『西下遺跡』

川島郷土史編集委員会一九九四『川島郷土誌』川島校区地域おこし事業推進委員会

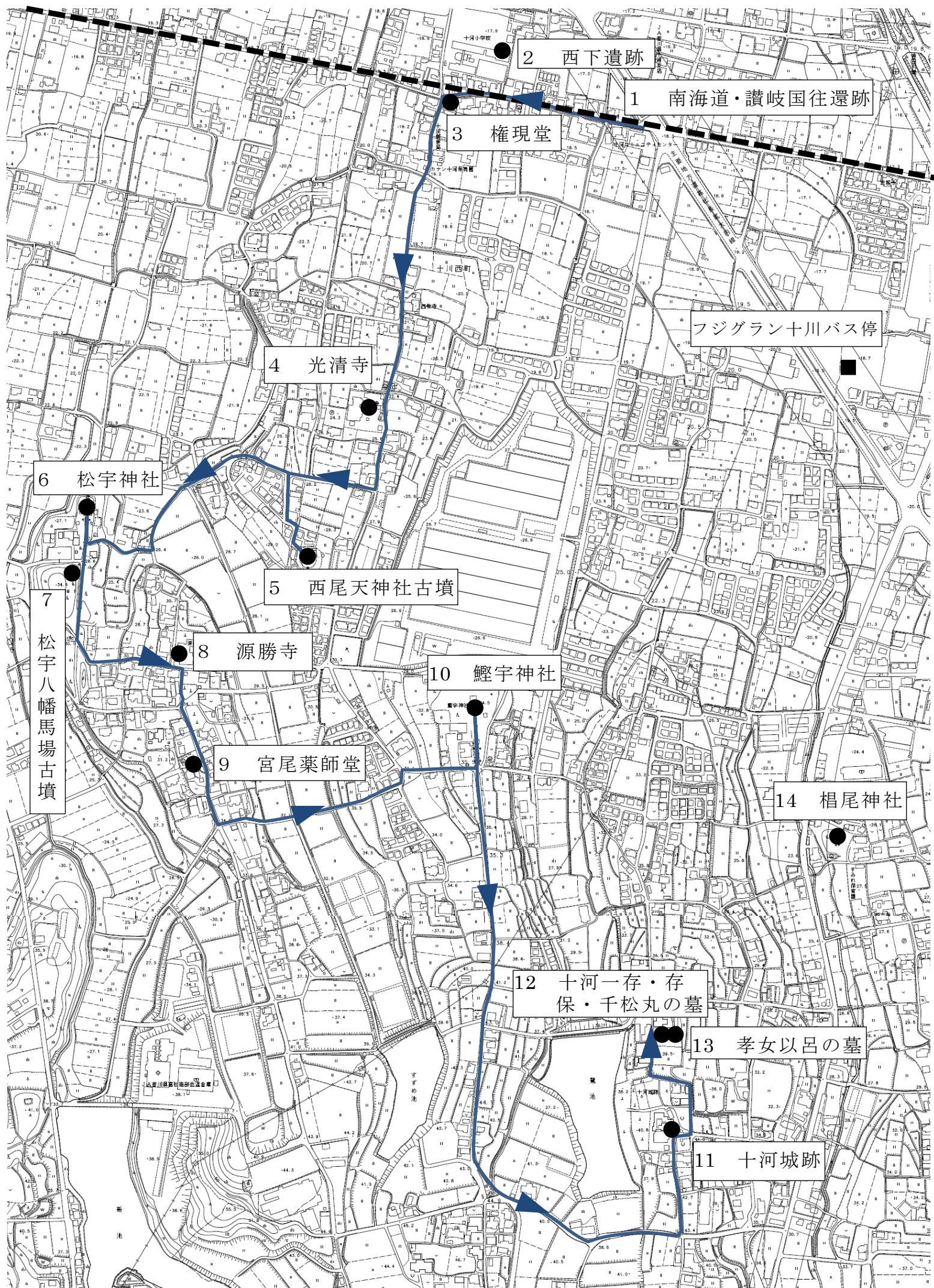
香川考古刊行会一九九四『香川考古』第三号 香川の中期古墳』

秋山忠一九八二『高松市の文化財・第七編 古城跡を訪ねて』高松市歴史民俗協会・高

松市文化財保護審議会

北条玲子ほか一九九六『市民文庫シリーズ⑳ たかまつ無印文化財』高松市図書館

香西茂資原著・井伊春樹訳一九八一『南海治乱記』(上)(中)(下) 教育社



2 西下遺跡

1 南海道・讃岐国往還跡

3 権現堂

フジグラン十川バス停

4 光清寺

6 松宇神社

5 西尾天神社古墳

7 松宇八幡馬場古墳

8 源勝寺

10 鯉宇神社

9 宮尾薬師堂

14 梶尾神社

12 十河一存・存保・千松丸の墓

13 孝女以呂の墓

11 十河城跡

5月25日（日） 十川東町からの復路

◆ことでんバス

(フジグラン十川) (瓦町駅) (高松駅)

12:35 発 → 13:16 着 → 13:26 着

13:10 発 → 13:47 着 → 13:58 着

次回のふるさと探訪は・・・

テ ー マ 丸亀市の金毘羅街道と社寺を訪ねる

と き 平成26年6月22日（日）

9:30～12:00頃

集合場所 JR丸亀駅南口

講 師 宮武 譲さん（郷土歴史研究家）

☆広報「たかまつ」6月15日号に開催案内を掲載しますので、
ご覧ください。

☆小雨決行。警報発令等により中止の場合のみ、文化財課（TEL
839-2660「午前7時30分～開始時間まで」）でお知らせします。
（電話が通じない場合は、「実施」です。）

★次回の交通案内★

◆JR予讃線

(高松駅) (丸亀駅)

8:16 発 → 8:56 着

8:45 発 → 9:15 着 (特急)



「ふるさと探訪」に
参加される皆様へ



※ 参加中は、次のことに充分留意し、
安全で意義のある探訪としましょう。

- 1 交通ルールを守り、交通安全を心がけましょう。
(必ず歩道を歩き、歩道が無いところでは、道路の端を
を一列で歩きましょう。)
- 2 無理をせず、体調には十分気をつけましょう。
- 3 引率者の指示に従い、整然と行動しましょう。
- 4 マナーを守り、他人に迷惑がかからないよう気をつけ
ましょう。
- 5 文化財や自然を大切にしましょう。